

# 【公開調教／媚薬漬け】敗戦令嬢の屈服記録

く玉座の下で四つん這いにされ、旧家臣の前で強制絶頂させられる高慢な  
姫君く

体  
験  
版

第1話

捕虜妃の塔・契約のしるし

扉が閉まった。

鍵の音が塔の中で長く響いた。

リーリエ・アルベルトは、最上階の螺旋階段の踊り場で立ち止まり、奪われた左手首の真珠の腕輪の跡を右手で軽く押さえた。

黒衣の女官が無言で先を歩く。

長い回廊。両脇の鏡。天井から下がる銀の燭台。

石の壁はひんやりと汗ばむほど磨かれていた。

「ここが捕虜妃の塔でございます」

女官が止まり、扉に手をかけた。

「皇帝陛下のおなりまでここでお待ちくださいませ」

扉が開いた。

リーリエは息を止めた。

寝室だった。

天蓋つきの寝台が中央に据えられ、その天井が鏡だった。

壁の三面もすべて鏡。蠟燭の光が何重にも反射して、部屋の奥

行きを溶かしていた。

（鏡……どうして、鏡なの）

女官が頭を下げて退いていく。

扉がまた閉まった。

リーリエは寝台の縁にも近づかず、窓辺に立った。眼下には、敵国グレイヘイム帝国の夜の街並みが広がっている。

遠い。

あまりにも遠い。

妹のセレナを最後に見たのはもうずいぶん前のことだった。あの王城はもう焼けて瓦礫だ。

リーリエは唇をわずかに歯で噛んだ。

扉が開いた。

ノックはなかった。

黒の正装。漆黒の長髪を後ろで結った男がひとり、入ってきた。灰銀の瞳はこちらを見て、すぐに離れない。

ヴァイス・グレイヘイム。

戦場の死神、と呼ばれる男。

「アルベルト公爵令嬢」

低い声だった。

「ようこそ。塔は気に入ったか？」

リーリエは背筋を伸ばした。窓辺から離れず、まっすぐに目を返す。

「皇帝陛下。お招きいただいた覚えはございませんわ」  
ヴァイスが笑った。

目だけが笑っていなかった。

「招いてないなあ。連行した、が正しいけど？」

ヴァイスは寝台の脇まで歩いてきて、懷から一枚の羊皮紙を取り出した。卓に置く。

「契約書だ。読まなくてもいい。要点だけ言う」

羊皮紙を指で軽く叩く。

「お前が俺の妃になれば、お前の妹のセレナとお前の旧王太子フェルナンド一族の処刑を保留してやる」



リーリエの呼吸が止まった。

（妹の名……どうして、知って）

「セレナ。十二歳。良い名前だなあ」

ヴァイスは灰銀の瞳をわずかに細めた。

「保留、だ。撤回じゃない。お前の振る舞い次第でいつでも  
執行する」

リーリエは卓の上の羊皮紙を見た。手を伸ばさない。

「皇帝陛下。わたくしは敗者ですが……」

声がほんのわずか震えたのを自分でも聞いた。

「玩具ではありません」

ヴァイスはなにも言わずにリーリエを見た。

十秒。二十秒。

リーリエは目を逸らさなかった。

ヴァイスが口の端だけで短く笑った。

「玩具、ね」

懐からペンを取り出し、卓に置いた。

「妃、と言ったんだけど？」

言葉の向きをひとつ変えたただけだった。

それだけで、リーリエは自分の中で何かが崩れる音を聞いた。

（妹を、守らなければ）

（誇りは後で取り戻せる。妹は後では、戻らない）

リーリエはペンを取った。

羊皮紙の末尾に自分の名を書いた。

文字の最後の線がわずかに揺れた。

「いい子だ」

ヴァイスはそう言わなかった。

代わりに卓の上の鈴を鳴らした。

女官が薄絹の衣装を抱えて入ってくる。

「着替えろ」

ヴァイスは椅子に座って、脚を組んだ。

「ここでだ」

リーリエが顔を上げる。

「皇帝陛下、それは――」

「契約だろ？」

ヴァイスの声は低く、柔らかかった。

「読んでないだろうから、教えてやるけど。第三条。捕虜妃の衣装の着脱は皇帝の指示に従う」

リーリエは、女官に薄絹を受け取って、手の中でその薄さを知った。

透けて、いた。

手のひらが衣装の向こうから、はつきりと見える。

女官が無言で頭を下げて退いた。

リーリエは後ろを向いて、ドレスのボタンに手をかけた。

指が強張った。

「こっち向いて、脱げ」

ヴァイスが言った。

「逃げ場、ないだろ？」

リーリエは振り返った。

灰銀の瞳が笑っていなかった。

リーリエはボタンをひとつずつ外した。

寝台に上がらされたとき、リーリエはもう薄絹一枚だっ

た。

肩。鎖骨。胸の輪郭。臍。脚の付け根のかけ。

全部、鏡で見えた。

天井の鏡で、自分の薄絹姿が上から下まで丸ごと映っていた。

「四つん這い」

ヴァイスの声。

短く。低く。

「今すぐ。動くなよ？」

リーリエは寝台のシーツに手をついた。膝をついた。背中がわずかに跳ねた。



(鏡……上にも横にも、全部)

(皇帝陛下がわたくしのこんな姿を全部、見ている)

ヴァイスが寝台に上がってきた。背後から覆いかぶさるように首筋に唇を寄せる。

ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅう♡

うなじへ、連続したキスが落ちる。リーリエの肩が跳ねた。

ヴァイスの指が薄絹の上から、リーリエの胸の先を探した。

布越しに、つんつん♡

軽く、つつくだけ。

「あ……っ♡」

声が勝手に漏れた。

「敏感だなあ。布越し、なのに」

ヴァイスは薄絹を脱がさなかった。

胸の先を布の上から、つんつん♡こりこり♡

二点を交互に。

「やあ……っ皇帝陛下、それは……っ」

「皇帝陛下、ね」

ヴァイスが耳元で笑った。

「公的な場じゃないけど？」

ヴァイスの右手が薄絹の前を辿って、下腹へ滑った。

脚の付け根。薄絹のいちばん薄いところ。

指が布越しにリーリエのクリトリスの位置を、つんつん♡

「ひあ……っ♡」

（やだ布の上なのにちゅごい……ちが、ちゅごい……っ）

リーリエの内側で、舌が、もつれていく。

「ココもうびくびく、してんなぁ」

ヴァイスは低い声で呟いた。

「捕虜ちゃん誇り高いお姫様のココがこんなに分かりやす

い」

ヴァイスの指が薄絹をいよいよ裂いた。

縦にひとすじ。

布が左右に開く。

鏡天井にリーリエの脚の付け根が丸ごと映った。

「上、見てみ？」

ヴァイスはリーリエの顎を後ろから掬い上げた。

「天井お前の見えるとこ、全部映ってるだろ？」

リーリエは目を閉じようとした。

ヴァイスの指がリーリエの瞼の上にふわりと触れた。

「閉じるなよ。今夜の契約のしるしはお前自身に見せてやる」

ヴァイスの指がいよいよクリトリスを直接捉えた。

くりくり♡くりくり♡こりこり♡カリカリ♡

四種、入り混じる愛撫が続けざまに。

「ひっ……あっ♡やあなにこれ、なにっ……」

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

濡れた音が自分の脚の間から、はつきりと聞こえてくる。

（やだこんなに出てるこんなにぐじゅぐじゅなってるちゅごい、ちゅごい……っ）

ヴァイスの指が二本、いよいよ膣口に潜り込んだ。

ぬぷっ♡ ぬぷぬぷっ♡ ぬぷぬぷぬぷっ♡

奥に向かって、まっすぐに。

「あ……あああ……っ♡」

「狭いなあ。お前ここ、誰にも触らせたことないだろ？」

ヴァイスの声は観察するように低い。

「鏡の中のお前の顔、見て答えろ」

リーリエは上を見た。

鏡天井に自分の顔が映っていた。

眉が寄って唇が半開きで目元が、潤んで――

知らない、女の顔だった。

（だれ……これだれの顔）

（わたくしの顔……これが）



「答えろ、お姫様。誰にも触らせたことないんだろ？」

ヴァイスは指を奥でゆっくりと回した。

ぐぢゅっ♡ぐぢゅっ♡ぐぢゅっ♡

「あぁっ……ないですっ……、はじめて……っ♡」

「うん。いい返事だ」

ヴァイスは指をゆっくりと抜いた。

とろり♡

リーリエの中から、透明な蜜がシートに落ちた。

ヴァイスはリーリエの脚をさらに横に開いた。

寝台のシーツに自分の膝を落とす。

顔をリーリエの脚の間に埋めた。

「ヴァ……皇帝陛下っ、なにを……っ♡」

リーリエが初めて、ヴァイスを名前で呼びかけて、途中で

言い直した。

ヴァイスはその言い直しを聞き流した。

ぬろっ♡

舌がリーリエの濡れた割れ目を下から上へ、ゆっくりと舐めた。

「ひあっ……♡♡」

ぬろぬろ♡れろれろ♡ちゅぱっ♡

舌が外側内側敏感な突起、すべてを丁寧に。

（やだ舌舌でちゅぱちゅぱされてちゅごいもおちゅごいなっ

てるあたまのなか、ちゅごい……っ♡）

「ぬぽぬぽ♡してやろうな」

ヴァイスは唇を一度離して低く、宣言した。

「お前のお豆さんが、もう剥けかけてるけど？」

ヴァイスの舌がいよいよクリトリスの薄皮の下に潜り込ん

だ。

ちゅぱっ♡ちゅぱっ♡ちゅうつ♡

「ひっひっひああっ♡♡やあっそれ、それはっ♡♡」

リーリエの腰がシートの上ではね飛んだ。

ヴァイスの両手がすぐにそれを掴み、押さえつけた。

「逃げるなよ？」

ぬろっ♡れろっ♡ちゅうつ♡ちゅぱちゅぱちゅぱ♡

舌が加速する。

リーリエの脚の指がシーツを強く掴んだ。

（ちゅごいちゅごいもおちゅごちゅごわかんない、もお、わ

かんない……っ♡♡）

ヴァイスが舌を離れた。リーリエの腰がまだ波打ってい

た。

ヴァイスは口元を手の甲で拭って、リーリエを見上げた。

「もう欲しいか？」

ヴァイスの低い声がリーリエの脚の間から、上がってきた。

「ちゃんと言わないと止めるけど？」

リーリエは唇を噛んだ。鏡天井に自分の脚を開いたままの姿が映っている。

声が出ない。

誇りが止めようとしている。

でも、体が――

「ほ……ほしいですっ……皇帝陛下もうほしい、っ♡」

リーリエは自分の口から、その言葉が出るのを聞いた。

ヴァイスがゆっくりと起き上がった。

リーリエの腰の高さに自分の腰を合わせた。

硬く、太いものがリーリエの濡れた脚の間に当てられた。

「契約のしるしをつけてやる」

ヴァイスは言葉だけは丁寧だった。

「鏡、見てろよ？」

ぐ……っ。

ぐぐぐっ……。

ぼちゅっ♡

ヴァイスのものがリーリエの中にねじ込まれていった。

ゆっくりと奥に向かって。

止まらず、奥まで。



「ひあ……っ♡♡」

リーリエの背中がしなる。

鏡天井に繋がった瞬間の自分が丸ごと映った。

（あ入ってる入ってきてるちゅごいおっきいちゅごいおなか、まんなか、熱い……っ）

ヴァイスは奥まで入れたまま、しばらく止まった。

リーリエの呼吸が整うのを待つように。

その間、ヴァイスの指がリーリエの汗ばんだ前髪を後ろに  
払った。

「鏡、見えてる？」

低く、囁く。

「お前のお腹の真ん中俺で繋がってる見える？」

「みえ……みえます……っ♡」

「いい子だなんてまだ言わない、けど」

ヴァイスがゆっくりと腰を引いて、また入れた。

ぼちゅっ♡

ぼちゅっ♡

ぼちゅっ♡

二度。三度。

リーリエの音節が崩れた。

「ああっ♡やちゅごちゅごいっ♡もうもお、っ♡」

「ちゅごいって、もう言ってるなあ」

ヴァイスは笑った。

「悪い令嬢、だ」

ぼちゅっ♡  
 ぼちゅっ♡  
 ぼちゅっ♡  
 ぼちゅぼちゅぼち

ゆ  
つ  
♡

奥への打ち込みが加速した。

ぐちゅぐちゅ♡ぐちゅぐちゅ♡

水音が二種、重なつた。

「あつあちゅごいちゅごちゅごい、い……っ♡♡」

リリーエの脚から、力が抜けた。

膝がシートの上でばらばらに揺れる。

ヴァイスの右手が、繋がっている場所のすぐ上、リーリエのクリトリスをとらえた。

くりくり♡こりこり♡くりくり♡

奥への打ち込みとクリへの愛撫が同時に。

「ひあっ♡ひあっ♡ひああっ♡もおもお、っ♡」

「もうなんだよ？」

「ちゅごい……っ♡だだめっなるなっちゃう、なる……っ

♡♡」

（ちがちがちがうわたくしこんなじゃこんなちゅごいちゅ  
ごもおちゅごちゅごくになるなっちゃ、う……っ♡）

ヴァイスの声が耳元で低く、命じた。

「達け♡」

短く。

「鏡見ながら、達け♡」

ヴァイスの腰がリーリエの最奥を強く、挟った。

ぼちゅん♡ぼちゅん♡ぼちゅん♡ぼちゅん♡ぼちゅん♡  
くりくり♡くりくり♡くりくり♡

同時に五種類の擬音がリーリエを取り囲んだ。

「あぁ♡♡♡♡♡もおもお、お……♡♡♡」

「鏡」

「みっ……みてみて、♡♡♡」

「自分の顔、見ろ」

リーリエは見た。

鏡天井に、自分の――

「ひい……っ♡♡♡♡」

脚が跳ねた。

腰がしなった。

リーリエの中でヴァイスのものが、いよいよ深く、最奥を  
押し上げた。

「いっぐいぐ、っ♡♡いぐう……っ♡♡♡」



ぴゅっ♡ぴゅっ♡ぴゅうつ♡

リーリエは、初めて自分の体から、自分のものではない液体が噴き出したのを感じた。

（だれこれだれわたくしなになってちゅごちゅごいもお、わかんない、っ♡♡）

ヴァイスがリーリエの最奥に留まった。

長く。

深く。

ヴァイスの呼吸が初めて、わずかに乱れた。

「は……はあ……っ♡」

ヴァイスの腰がリーリエの中で震えた。

どくっ。

どくっ。

どくっ。

熱いものがリーリエの最奥に注がれていった。

（あれあつおなかおなかのまんなかあつ、いい……っ



しばらく、二人とも動かなかった。

ヴァイスがリーリエの中から、ゆっくりと抜いた。

とろり♡

白いものとリーリエの蜜が混じって、シーツに落ちた。

ヴァイスはリーリエを自分の腕の中に抱き起こした。

リーリエの体は、もう力が入らなかった。鏡天井に、ヴァイスに抱かれた自分がトロリ♡と溶けた表情で映っていた。

「上手だったな♡」

ヴァイスはリーリエのうなじに、もう一度軽くキスを落としました。

ちゅっ♡ちゅっ♡

「契約のしるし、ちゃんとついた」

ヴァイスはシーツの端を引き寄せ、リーリエの体を覆った。

リーリエの瞼がゆっくりと落ちた。

うつらうつらと意識の縁でヴァイスの低い声が聞こえた。

「お前の妹のことは、明日また話そうな」

リーリエの呼吸が深くなり、やがて規則的になった。

ヴァイスはしばらく、動かなかった。

リーリエの寝顔を、ただ見ていた。

灰銀の瞳が初めて、わずかに低くなった。

卓の上に女官が置いていったらしい、小さな包みがあった。中身はリーリエが連行された日に取り上げられた、真珠の腕輪。

ヴァイスはそれを手に取った。

指の間で転がした。

「リリ」

低くひとり、呟いた。

「覚えて、ないんだなあ」

ヴァイスは腕輪をリーリエの枕元にそつと置いた。

窓の外で夜の街の燭台がひとつ、また消えていった。

# 体験版はここまで

続きは本編をお求めください